

## 2. ウェルビーイング評価法

### 2.1 手法の概要

ウェルビーイング評価法は、財の経済価値を、主観的ウェルビーイングへの影響から推定する手法である。この手法では、効用そのものを直接測定する指標として生活満足度を用いることから、生活満足度アプローチとも呼ばれる(Fujiwara & Campbell, 2011)。個人の選好や市場取引に基づいた評価を前提とせず、人びとの効用や財の消費経験に関する観察データを用いて非市場価値評価を行う点に特徴がある。

この手法の枠組みを図1に示す。まず、所得、評価対象となる財の消費量、生活満足度に関する(一次または二次)データを収集する。その後、所得が生活満足度に与える影響( $\beta_1$ )と、評価対象財が生活満足度に与える影響( $\beta_2$ )を統計的に推定する。これらの推定結果を基に、限界代替率(単純には $\beta_2/\beta_1$ )の計算により、評価対象財の価値を貨幣単位で推定することが可能となる。簡単に言えば、財がもたらす生活満足度の変化を、所得の増加による生活満足度の変化と比較することで、その価値をお金に換算する方法である。

スポーツ振興は、健康増進、社会参加の促進など、多岐にわたる効果をもたらし、最終的には個人のウェルビーイング向上に貢献すると考えられる。ウェルビーイング評価法は、こうしたスポーツ活動の多様な効果を包括的に捉え、価値を金銭単位で可視化する上で有用な手法である。たとえば、週1回以上スポーツを実施することが生活満足度を0.1ポイント押し上げると推定された場合、同じ0.1ポイントの向上をもたらすために必要な所得増加額を計算すると、年間100万円に相当する。この結果から、「週1回以上スポーツを実施することの社会的価値は年間100万円に相当する」と結論づけることができる。本手法の理論的背景や詳細についてはFujiwara and Campbell(2011)を参照されたい。

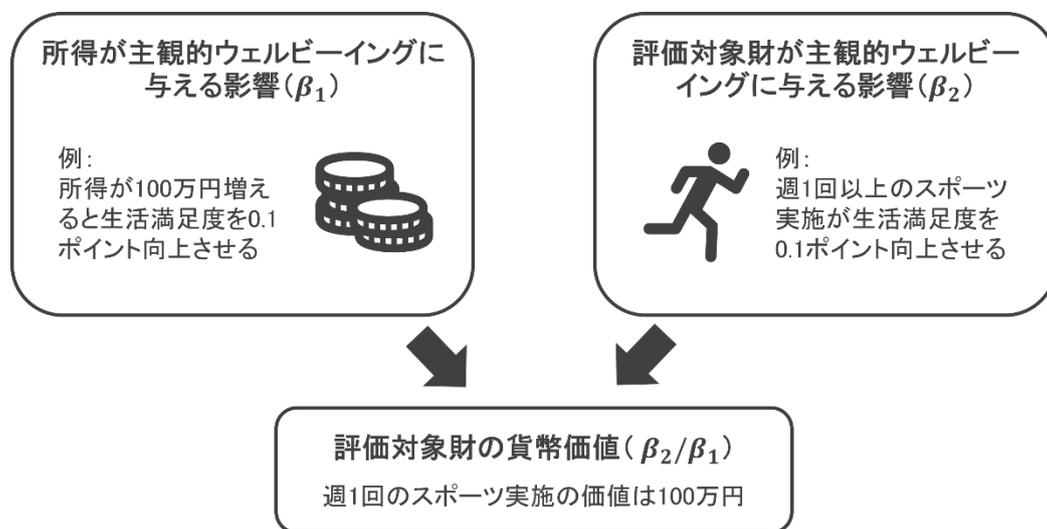


図1 ウェルビーイング評価法の枠組み

ウェルビーイング評価法は、市場取引を伴わない財やサービスの価値を貨幣単位で評価する手法として有効である。たとえば、スポーツ活動は健康増進や社会的つながりの形成など多面的な便益をもたらすが、その価値は市場価格によって明示されるものではない。本手法の活用により、こうした非市場価値を定量化し、経済的な指標として示すことが可能となる。

本手法の特徴のひとつは、自己申告による生活満足度データを活用し、評価対象財がもたらす効用を直接測定できる点にある。従来の非市場価値評価手法とは異なり、実際の「経験」に基づく生活満足度の変化を分析するため、仮定や市場取引データに依存せず、より実態に即した価値推定が可能となる。たとえば、表明選好法では仮想的な支払意思額をたずねるが、これは実際の選好と乖離する可能性がある。一方、顕示選好法は不動産市場や労働市場などの市場行動を基に価値を推定するが、市場データが存在しない場合には適用が困難となる。

もうひとつの重要な利点は、政策評価への実用性の高さである。本手法を用いることで、異なる財の社会的価値を統一的な指標（貨幣換算されたウェルビーイング）を通じて比較できる。これにより、政策の優先順位を明確にし、公共資源の最適な配分に貢献できる。

スポーツ振興においても、本手法は多様な活動の社会的価値を比較する手段として有効である。「するスポーツ」「みるスポーツ」「ささえるスポーツ」のどの活動が、ウェルビーイングをより向上させるかを定量的に評価できる。また、スポーツ分野に限定せず、他の公共政策との比較を通じて、幅広い政策オプションの中から最適な施策を選定するための根拠としても活用できる。従来、スポーツ振興の意義は自明視される傾向があったが、ウェルビーイング評価法により、その社会的価値を金銭単位で示すことができる意義は大きい。

一方で、本手法にはいくつかの課題がある。まず、生活満足度を用いた価値推定には、所得と評価対象財がウェルビーイングに与える因果関係の正確な推定が不可欠である。推定の精度が低ければ、評価結果の信頼性が損なわれる。また、本手法は過去の経験に基づくため、将来の事業がもたらす社会的価値の測定には限界がある。さらに、非利用価値の推定も困難である。非利用価値とは、実際に財を利用しなくても人びとが感じる価値を指す。たとえば、スポーツ施設を利用しない人でも「いつか使うかもしれない」や「次世代に残したい」と考えることがある。こうした価値は生活満足度データから直接測定しにくく、ウェルビーイング評価法では十分に捉えられない可能性がある。

## 2.2 スポーツ活動のウェルビーイング評価についての先行研究

表 1 に示すように、スポーツ活動のウェルビーイング評価に関する研究は、2010 年頃から学術研究および民間企業のレポートにおいて着実に蓄積されている。この中には、政府機関やスポーツ統括団体による委託研究も含まれており、たとえば、英国デジタル・文化・メディア・スポーツ省 (Fujiwara et al., 2014; Marsh et al., 2010)、スポーツ・イングランド (Fawcett et al., 2024)、オーストラリア・スポーツコミッション (Gratton et al., 2017)、スポーツ・ニュージーランド (Simetrica-Jacobs, 2018) などが関与している事例が見受けられる。

表 1 では、価値測定が行われたスポーツ活動の種類、対象国、使用されたウェルビーイング指標、そして各研究で試算された金銭価値を示した。スポーツ活動の種類としては、スポーツ・身体活動が大半を占め、スポーツ観戦やスポーツボランティアの金銭的価値を推定した事例は比較的少ないことがわかる。また、スポーツ活動の評価は「過去 1 年」と「過去 4 週間」の実施状況に基づいており、頻度に関しては年単位、月単位、週単位、あるいは実施時間など、さまざまな変数が使用されている。

たとえば、Fawcett et al. (2024) の研究レポートでは、イングランドにおけるスポーツ活動の社会的価値を実施時間に基づいて金銭評価した額が報告されている。週に 150 分以上のスポーツ実施は日本円換算で約 48 万円、週に 30 分から 149 分の実施は約 23 万円に相当する社会的価値を創出することが示され

ている。Gratton et al. (2017) の研究では、オーストラリアにおいて、週 1 回以上または週 3 回以上 1 回 30 分以上のスポーツ実施が約 77～78 万円の社会的価値を生むことが報告されている。

特に高い金銭的価値が示されているのは、Downward and Rasciute (2011) や Downward and Dawson (2016) の研究であり、前者はイギリスにおいて過去 1 年間における 1 回以上のスポーツ実施が約 359 万円、過去 4 週間におけるスポーツ実施が約 441 万円に相当すると試算している。このような金銭的価値の違いは、主に所得が生活満足度に与える効果の係数 ( $\beta_1$ ) の違いに起因しており、 $\beta_1$  を適切に推定しないとスポーツ活動の価値が過大に評価される可能性があることを示唆している。詳細な文献レビューについては、Schoemaker (2023) を参照されたい。

本研究では、スポーツ実施、スポーツ観戦、スポーツボランティア、公営競技の投票など、さまざまなスポーツ活動の価値を測定することにより、これらの研究蓄積に貢献することを目指している。

表 1 スポーツ活動のウェルビーイング評価研究の概要

著者(年)	対象国	WB 指標 <sup>a</sup>	スポーツ活動変数	1 年間 <sup>b</sup>			4 週間	社会的価値 (円) <sup>c</sup>	
				年	月	週	時		月
Marsh et al. (2010)	イギリス	LS (1-7)	年数回のスポーツ実施	○				1,382,262～ 3,239,724	
			年 1 回以下のスポーツ実施	○				1,496,310	
			月 1 回以上のスポーツ実施		○				1,689,431～ 3,810,724
			週 1 回以上のスポーツ実施			○			2,108,938～ 4,290,296
Downward & Rasciute (2011)	イングランド	H (1-10)	スポーツ実施	○				3,589,870	
			スポーツ実施				○		4,411,339
Fujiwara (2013a)	イングランド	H (1-10)	スポーツ実施				○	292,343	
Fujiwara et al. (2014)	イギリス	LS (1-7)	スポーツ実施	○					214,220
			チームスポーツ実施	○					214,220
			個人スポーツ実施	○					157,386
			フィットネス実施	○					-250,525
			水泳実施	○					309,830
Downward & Dawson (2016)	イングランド	H (1-10)	スポーツ実施時間(分)				○	8,633,434	
			週 3 回以上 1 回あたり 30 分以上の中強度のスポーツ実施時間(分)				○	9,051,610	
			週 1 回未満の中強度のスポーツ実施時間(分)				○	7,089,984	
Gratton et al. (2017)	オーストラリア	LS (0-10)	週 3 回以上 1 回あたり 30 分以上のスポーツ実施			○		769,985	
			週 1 回以上 1 回あたり 30 分以上のスポーツ実施			○		778,715	

注：

<sup>a</sup> ウェルビーイング指標。LS は生活満足度、H は幸福度を指し、括弧内は評価段階を示す。

<sup>b</sup> 「1 年間」「4 週間」は、それぞれ過去 1 年間および過去 4 週間のスポーツ活動の実施状況が聴取されていることを示す。下段の「年」「月」「週」「時」は、スポーツ活動の実施状況が年、月、週、時間あたりの頻度として変数化されていることを意味する。

<sup>c</sup> 1 年あたりの金銭的価値。円換算は 2025 年 3 月 7 日時点の為替レート (Yahoo! ファイナンス) を基に算出。

表1 スポーツ活動のウェルビーイング評価研究の概要（続き）

著者(年)	対象国	WB 指標 <sup>a</sup>	スポーツ活動変数	1 年間 <sup>b</sup>		4 週間	社会的価値 (円) <sup>c</sup>	
				年	月	週		時
Lemyre et al. (2018)	カナダ	LS (0-10)	ゴルフ実施	○			766,786	
			スポーツ実施	○			499,151	
			週1回以上のチームスポーツ実施			○		454,647
			週1回以上のスポーツ実施			○		536,869
Orlowski & Wicker (2018)	ドイツ	LS (0-10)	年に数回から月1回以下の運動・スポーツ実施	○			27,286～ 80,104 <sup>d</sup>	
			月1回以上の運動・スポーツ実施		○		-70,530～ -41,169 <sup>d</sup>	
			週1回以上の運動・スポーツ実施			○	-567,590～ -122,231 <sup>d</sup>	
Simetrica-Jacobs (2018)	ニュージーランド	LS (0-10)	週に30分から150分の中強度から高強度の身体活動			○	48,221	
			週に150分から300分の中強度から高強度の身体活動			○	106,962	
			週に300分以上の中強度から高強度の身体活動			○	177,820	
			定期的なチームスポーツ実施			○	60,171	
			定期的な個人スポーツ実施			○	77,928	
			国のガイドラインに準拠した身体活動			○	110,412	
			定期的なボランティア実施			○	47,295	
			スポーツクラブ会員	○			68,755	
Shi et al. (2019)	カナダ	LS (0-10)	月12回以上の身体活動			○	64,993 <sup>e</sup>	
			月4から11回の身体活動			○	41,921 <sup>e</sup>	
Thormann et al. (2022)	ドイツ	LS (0-10)	月あたりのスポーツ実施時間			○	2,989～ 186,181 <sup>f</sup>	
Choe & Baek (2023)	韓国	H (1-10)	スポーツ実施	○			74507	
			スポーツ観戦	○			—	
Benison et al. (2024)	ニュージーランド	LS (0-10)	スポーツ実施			○	121,352～ 590,098	
Fawcett et al. (2024)	イングランド	LS (0-10)	週に150分以上のスポーツ実施時間			○	475,200	
			週に30分から149分のスポーツ実施時間			○	228,096	
			月1回以上の定期的なボランティア実施			○	190,080	
			週1回以上の定期的なボランティア実施			○	399,168	
Kokolakakis et al. (2024)	欧州8カ国 <sup>g</sup>	LS (0-10)	スポーツボランティア活動時間(分)			○	271,269～ 829,764	

注：

<sup>a</sup> ウェルビーイング指標。LSは生活満足度、Hは幸福度を指し、括弧内は評価段階を示す。

<sup>b</sup> 「1年間」「4週間」は、それぞれ過去1年間および過去4週間のスポーツ活動の実施状況が聴取されていることを示す。下段の「年」「月」「週」「時」は、スポーツ活動の実施状況が年、月、週、時間あたりの頻度として変数化されていることを意味する。

<sup>c</sup> 1年あたりの金銭的価値。円換算は2025年3月7日時点の為替レート（Yahoo!ファイナンス）を基に算出。

<sup>d</sup> 1ヵ月あたり、<sup>e</sup> 1週間あたり、<sup>f</sup> 1時間あたりの金銭的価値を算出。

<sup>g</sup> オーストリア、クロアチア、ドイツ、ギリシャ、リトアニア、オランダ、スペイン、イギリス